

「三春町建築賞」による地域の建築文化向上の試み

Miharu Town Architecture Prize for Enhancing a Local Building Culture

中島直人

Naoto Nakajima

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻准教授／都市計画。1976年生まれ。
東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士課程修了。博士(工学)。同専攻助手、助教、
慶應義塾大学環境情報学部専任講師、同学部准教授を経て、2015年4月より現職。
著書に『都市美運動 シヴィックアートの都市計画史』ほか。

まちづくりの出発点としての三春町建築賞

福島県三春町は戦国時代にルーツを持つ旧城下町で、人口18,304人(2015年国勢調査)の地方小都市である。この小さなまちで1982年に創設された三春町建築賞は、1991年度までは毎年、以降は隔年での募集を続け、直近の2015年度で22回を数えている。賞の対象は住宅や商店を中心とした町内の新築・改築建築物で、建築主、設計者、施工者の3者を表彰する制度である。応募数は累計で338件、受賞建築物数は110件にものぼる。

三春町建築賞創設の原点は、伊藤寛(前三春町長：在任期間1980-2003年)が助役に就任してすぐの1976年に企画したまちづくり講演会にさかのぼる。講師を務めたのは三春町出身の建築家・大高正人であった。この講演が故郷での初仕事であった大高は「風格のあった三春町というものを見直す必要がある」ことを力説した。「広い歩道に沿って街路樹や花壇が並び、ロータリーの噴水の周りには鳩が群がっている」と未来のまちの姿を語る伊藤らに対して、「都会の真似事は駄目だ」「町民みんなで考えて、自分たちが納得できるまちづくりをすることが大事」と諭した。まちづくり講演会は、行政のみならず、地元青年会や建設関連業者たちの地域おこし、まちづくりの機運を多に刺激した。大高はこの講演会を機に三春町で幾つかの公共建築の設計に携わることになるとともに、伊藤が1980年に町長に就任して以降、都市計画顧問として三春のまちづくりへの助言を続けていくことになった。

三春町建築賞はそうしたまちづくりの出発点において、「行政というのは規制をしたがるけれども、よいものを町民みんなで褒め合うということの方がずっと大事であり効果があるのではないか」という伊藤らの思いのもと、三春の建築文化の向上を目的として誕生した。初代選考委員長には建築史家の村松貞次郎が就任した。大高と村松とは東京大学第二工学部建築学科の同窓であった(村松が後輩にあたる)。ただし村松が選考委員長を引き受けることになった経緯は、

単に大高の推薦があったからということではない。今でも地元の人々は村松を三春に引き込んだある夜のエピソードを楽しく語ってくれる。

当時、プライベートで全国の桜を見て回ることを楽しんでいた村松夫妻に、大高が三春名物の滝桜を紹介したのが村松と三春の最初の縁であった。そして、まちづくりに取り組み始めていた青年会メンバーが桜の鑑賞を目的に来訪した村松夫妻を案内した。その晩には夫妻の宿泊先の山荘に板屋、左官屋などの地元の職人たちを集めて、酒宴を催した。宴は大変盛り上がった。村松は三春の人々と打ち解け、彼らの建築やまちづくりへの思いに共鳴し、「三春のために一役買うから、何でも言ってきなさい」と約束した。その後、建築賞の話が具体化していくなかで、この言質と大高の了解のもと、村松に選考委員長を依頼したというのである。

村松貞次郎と三春町建築賞

村松は三春町建築賞をどのような賞だと考えていたのだろうか。村松以外の選考委員は地元の各種団体から選出された三春の町民が名を連ねた。村松の三春町建築賞に対する思いを表すエピソードがひとつ伝わっている。第1回の選考を終えたあと、残念ながら受賞に至らなかった作品の関係者から不平の声が上がった。そこで、三春町としては賞の選定にもう少し権威を持たせるべく、村松以外にも外部の建築専門家を審査員に追加しようと伊藤が村松のもとに相談しにいったところ、村松が烈火のごとく怒り出したというのである。「あなた方は自分たちが何をやっているか全然ご承知ないんですね」と。「私は町民みんなで、素人が集まって審査をするという心意気に打たれてご協力しようと引き受けたのであって、あなたが言うように専門家の視点で建築賞をやるんだったら、世の中にごまんとうあります。私はそういうことにかかわる気はまったくありません。辞めさせてもらいます」。怒られはしたものの、伊藤はいたく感動した。

現在に至るまで、選考委員長以外は皆、地元関係者が選考委員を務めている^{注1}。特徴としては、第一に応募者も選考委員も地元ということで、自分たちで自分たちの仕事を評価する仕組みとなっている点である。また、もうひとつの特徴は1989年度の第8回以降、地元女性団体から複数名が選考委員として加わっていることである。村松は建築賞の評価において、生活に密着した女性の視点、特に「使い勝手」を重視した。

村松の三春町建築賞への期待、そして手ごたえは、毎年の講評文に見て取れる。村松は第1回の講評文のなかで、「①新しい街づくりへの貢献度、②建築物の美しさ、③建築物の機能性、④建築の技術、⑤その他」の5点を総合的に評価すると選考基準を提示した。そして、毎年の講評を通じて、三春町建築賞で何を重視するのかを説き続けた。「応募作品にやたらにお金をかけたものが多くなることを心配していたが、今年の入選作は、むしろ低価格ではあるが、設計と施工で十分にそのハンディキャップを埋めて、堅実な成果をあげたものが多かったことは喜ばしい」(第3回)、「容れものとしての建築だけでなく内部の生活文化の充実と向上、およびその生活を反映したものとしての外部空間の充足が図られることを期待します。容れものだけが立派になってもそれは借り物の美しさにすぎません」(第6回)、「らしさ」というものは過去にすでにできていたパターンではなく、これからの三春をつくっていく、その行き方、考え方、その働き、流れの中に、ある特色、傾向として形成されてくるものが“三春らしさ”ではないだろうか。「らしさ」は青い鳥ではなく、それを追い求め、探し続ける私たちの軌跡が“らしい”を形成する」(第11回)といったように。

村松は一つひとつの受賞作についても、愛情のこもった選評を書いた。村松が急逝したのを受けて、1997年度(第13回)にピンチヒッターとして選考委員長を務めた大高は、それらの過去の選評を読み、村松の無限の優しさに涙したという。「ひとつの名建築を選ぶための賞ではない」三春町建築賞が定着していく過程において、「建築賞というものは速効性を期待するものではありません。潮が満ちてくるように、ゆるやかにしかも根底から生活と建築文化の向上を目指すものです」(第8回)という考えで三春を見守り続けた村松の果たした役割は大きい。

三春町建築賞の現在

選考委員長は、1999年度の第14回から建築史家の谷川正己が引き継ぎ、現在に至っている。かつて囑託として村松研究室に在籍していた経験を持つ谷川は、大高、村松の両名の意図を引き継ぎ、独断的に選考を取り仕切るので

はなく、地元の選考委員たちの自発的な意見を何よりも尊重した。谷川は選考委員会について「建築を専門とする委員と、専門としない委員が相半ばする構成がよく、互いに気付かない視点を披露して、議論し建物とは何か、住まいとは何かという本質に迫ります。これは実に素晴らしい勉強会ではないかと思いました」(第17回)と書いている。

賞への応募件数自体は、2000年ごろを境に減少傾向が続き、ここ5回は毎回10件程度となっている。応募者も熱心な地元工務店数社に限定されてきている。その背景には、三春町での大規模な宅地造成などが一段落したことに加え、東日本大震災後は復興住宅等の仕事に地元建設関連業者も集中せざるをえないという状況がある。一方で、地元業者同士の相互評価になじめない、すでに暮らし始めている建築主から現地視察等に関する協力が得られないといった、制度的な課題も指摘されている。しかしそれはまた、建築文化の向上の試みが四半世紀を経過してもなお途上で、時間のかかる息の長い取り組みであることの証左でもある。

一方で、三春町建築賞が三春のまちに本当の意味で根付いていることは、直近の第22回の選考会(2015年10月8日~9日)のエピソードからもうかがえる。谷川が当日に急遽欠席するというアクシデントがあり、選考委員長不在のまま選考を進めなくてはならなくなった。当日集まった選考委員たちは、まず選考方法について、前回までの書類選考による選抜を経ての現地視察というプロセスを廃し、全作品の現地審査を実施することを決めた。そして、過去の回と同様に一つひとつの建物を丁寧に見て、さまざまな意見を交わしながら選考を行ったのである。つまり、三春町建築賞は地元関係者の手だけでしっかりと運営された。

大高は賞を漠然としたものにしないうるためにも選考委員長の人選が大事であると考えていた一方で、町民自らの手でまちづくりを進めることが肝要であるということを繰り返し伝えていた。村松は選考委員会の晩には、必ず地元の選考委員たちと一夜反省会を開き、委員の眼を高める努力をしていたという。三春町建築賞を通じた地方小都市における建築文化の向上の試みとは、三春らしい建築の生成とともに、建築をめぐる三春らしい自治的な場の涵養そのものだったのである。

注1 現在の選考委員会委員(2015年度、第22回)は、学歴経験者1名(谷川正己)、三春町都市計画審議会1名、三春町商工会1名、福島県建築士会田村支部1名、三春建築大工組合1名、三春青年会の会1名、三春町民生保護女性会1名、三春町婦人会1名、三春経営塾1名、福島県建築建設事務所1名の計10名である。
注2 各エピソードは、筆者自身による伊藤寛、内藤忠(元三春町商工会長)ほかへのインタビュー(2016年7月3日、文化庁国立近代建築資料館所蔵の大高正人資料関係オーラルヒストリー)および三春町役場建設課担当者へのヒアリング(2017年3月17日)に基づき、記述した。

参考文献
*A 「三春町建築賞30周年記念誌 入賞作品集」(三春町、2013)
*B 大高正人・川添登編『メタポリズムとメタポリスタチ』(美術出版社、2005)
*C 豊原敬、松澤洋、中島直人「建築家大高正人の仕事」(エクスナレッジ、2014)